
新世紀エヴァンゲリオン ～光る明日を掴むために～

G E N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン

（光る明日を掴むために）

【Nコード】

N9770X

【作者名】

GEN

【あらすじ】

もしもあの最終決戦で、NERVが勝利していたら。

NERVの人々に光る明日はやってくるのだろうか。

交錯する運命と絆。

未来をも巻き込んで、NERVはSEELEの一掃に挑む。

七色のドーム

空中を円を描きながら舞う9体の白きエヴァシリーズ。

その円の中心に横たわる赤きエヴァ式号機。

顔面に槍が刺さり、腹部は開かれ、内臓はほぼなくなっている。

「殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる……」

アスカの声とともに式号機が動き出した。

「アスカ、もうやめて!」

マヤの声は届かない。

式号機の動きに気づいたエヴァシリーズが一斉に槍を構えた。

アスカはまだ気付かない。

「アスカ!」

マヤがそう叫んだとき、エヴァシリーズが槍を放った。

「アスカアアアアア!」

その時だった、

式号機の前に黒い影が立ちはだかった。

「初号機!？」

発令所の面々に動揺が走る。

「アスカも、綾波も。自分の大切な人だ。

死にたくないからって、大切な人を守れなかったら、きっと後悔する。

ここで負ければ、大切な人がみんな死んじゃうんだ。

だから、負けるわけにはいかないんだ!」

「いつの間に、起動したんだ?」

普段冷静な冬月も驚きの色を隠せない。

「初号機、A・T・フィールドを展開していきます。」

マヤの報告が入る。

時を同じくして初号機のA・T・フィールドに槍が触れた。

「シンジ君危ない!!」

マコトの叫び声が発令所に響く。

その声を見捨て、お構いなしとばかりに初号機はどんどんフ

イールドを強くしていく。

ロンギヌスの槍のアンチA・T・フィールドと、初号機のA・T・フィールドがぶつかり合い、周囲に強烈な爆風が吹き荒れる。

発令所は、地震のような大きな揺れに見舞われた。

書類やパソコン、あらゆるものが机から落下した。

初号機は依然ロンギヌスの槍を受け止め、弐号機を守っている。

槍が半分ほどフィールドに刺さった時、周りはN？爆弾を落としたような強い閃光に包まれた。

カメラには粉塵が積もり、初号機と量産機、弐号機の様子は分からなくなった。

「カメラの清掃、急げ！」

冬月がすぐに命じた。

「副指令・・・あり得ません・・・」

マヤが弱い声で冬月に報告した。

「アンチA・T・フィールド、初号機のA・T・フィールドによって、消失しました・・・」

量産機は、すべて蒸発、初号機と弐号機の安否は分かりません。

「

「そんな馬鹿な!!、ロンギヌスの槍はどんなA・T・フィールドでも貫けるはずだ。それがA・T・フィールドによって消し去られるとは・・・」

カメラの清掃が終わり、風景がモニターに映る。

「おおー!」

発令所が驚きに包まれた。

ジオフロントは焼け野原となり、第3新東京市があった天井部分ほとんど蒸発。

本部以外のすべての建物は吹き飛ばされ、ジオフロント内の気温は50度を越えていた。

ロンギヌスの槍はそこら中に散らばり、初号機と弐号機がいた場所には七色に光るドームがあった。

「人の感情を表す、七色のドームか・・・」

冬月はただそのドームを何も言わずに見つめていた。

七色のドーム（後書き）

どうも、作者のGENと申します。
改訂版を公開しました。
今後もしよろしくお願いします。

反撃開始

シンジはドームを作り上げるとすぐに式号機の方へ向いた。

「アスカ、大丈夫・・・」

式号機を見たシンジは言葉を失った。

刺さっていたロンギヌスの槍が1本から2本に増えていたからだ。

量産機8機が放った槍のうち1本はシンジが作ったドームを貫通し、式号機のコアをとらえていた。

「アスカ！ アスカ！」

いくら通信で呼びかけても返事がない。

「そんな・・・」

シンジはそうつぶやいた後、槍を抜き、プログナイフを取り出すと式号機の首元に突き立てた。

ラミエル戦でレイを救った時と同じ方法をとった。

「ガゴン」

鈍い音とともにプラグが排出された。

同時に排水が始まる。

プラグには槍のものと思われる穴があいている。

シンジはそれを見ると初号機から降り、弐号機のプラグへと駆け寄った。

扉にはあの時のようにロックがかかっていた。

シンジは迷わず高温になっている取っ手を握った。

「ぐううう」

あまりの熱さに顔が歪む。

しかしそれにも耐え、プラグの扉を開いた。

「アスカ！」

シンジはプラグの中へと飛び込んだ。

「シ・シンジ・・・」

アスカはときれときれの声でシンジの名を呼んだ。

シンジはそんなアスカの姿を見て驚いた。

左腕のひじから先がなくなり、切れている断面からは大量に出血している。

「アスカ・・・そんな・・・」

シンジは言葉を失った。

そんなシンジにアスカはとぎれとぎれの声で尋ねる。

「シンジ・・・ここは・・・ここはどこ・・・。りよ・・・量産機は・・・」

「初号機のA・T・フィールドが固まった空間だよ。・・・量産機はすべて蒸発した・・・」

シンジはしっかりと話せなかった。

アスカに大怪我を負わせてしまったというショックが受け止められないのである。

「そう・・・シ・・・シンジが守って・・・くれたんだ」

「ごめん、アスカ・・・僕が、僕が弱いせいで・・・」

シンジは泣きながら謝った。

（発令所）

発令所は大慌てだった。

初号機が量産機を殲滅したものは良いものの、本部内に侵入した戦略自衛隊がまだ殲滅できていないのである。

しかも葛城一尉や碇司令、綾波レイまで行方知れずになっているのだから、大変である。

「旧本発令所が占領されました!!」

「もうすぐここに来ます!!」

オペレーターたちの声が飛び交う。

「発令所までの全隔壁を封鎖。扉もすべてロックをかけろ!!」

冬月は碇の代わりとして必死に指揮を執る。

しかしその努力もむなしく

「隔壁、すべて突破されました」

「2部隊がここに来ます」

全ての障害が突破されてしまった。

「万事休すか・・・」

冬月が短くつぶやいた。

しばらくしてドアが突き破られた。

「戦略自衛隊だ！全員手を上げろ！！」

怒号と共に戦略自衛隊約30人が発令所に押し入った。

「何の用だ」

冬月はこんなことを聞いても無駄と知りつつ聞いた。

「それは1番自分たちが分かっているだろう。」

隊長と思わしき男がにやりと笑いながら答えた。

「礼儀をわきまえろ！」

冬月が耐えられずに怒鳴ったが、完全無視である。

「あのNERVも、こんなに弱くなったとは残念ですね」

男の横にいたもう一人も笑った。

「ワッハハハハハ」

戦略自衛隊の隊員たちが笑いだした。

NERVによって仕事のほとんどを奪われた戦略自衛隊の隊員は、この時ばかりとNERVの人間を散々ののしった。

「くう・・・」

冬月をはじめとするNERV職員は手を挙げながらそれに耐え

るしかなかった。

笑いがおさまると男はトランシーバーで別部隊と交信を始めた。

「こちら第6、第15。発令所の占拠に成功しました。」

話している相手は上官らしく、礼儀をわきまえなかった男も敬語を使っている。

「よくやった。すぐに我々もそちらへ向かう。」

上官の声が聞こえてきた。

その時、トランシーバーの向こうで何かが起こった。

「ウワァー！！逃げるな！！迎え撃て！！」

そんな上官の必死の命令と兵士たちの悲鳴、そしてものすごい数の銃声が聞こえてきた。

戦略自衛隊の隊員や、NERV職員に動揺が走る。

「大変だ！こくれ・・・」

そこで交信は途切れた。

男は隊員達に向き直ると小声できぱきと命令を下した。

しばらくすると兵士たちが散っていき、発令所の軍隊は10人足らずになった。

(ターミナルドラマ)

アダムとリリース、禁断の融合の最中だった。

カチャ。

銃を構える音がした。

「誰だ」

「お久しぶりです。碇所長。」

「司令だ。いい加減覚えろ。」

ゲンドウは笑った。

そして後ろを向いた。

そこには、自分より少し背の高い、茶色の髪の毛をした男が立っていた。

「久しぶりだな、塔條シンヤ。何年ぶりだ。」

「15年ぶりです。」

「そうか、南極観測以来か。」

「今は加治さんのもつでSPをしています。」

「今日は何の用だ。」

「実は、加治さんと一緒に戦自狩りでもということだ。」

それを聞いたゲンドウは驚いた。

普段どんなことがあつても感情を顔に出さないゲンドウが驚きの表情を顔に出した。

「加治が、生きているのか」

「ええ、そうです」

「私をどうするつもりだ。」

今まで質問に答えてきたシンヤがパタリと口を閉ざした。

「殺すのか」

「どうお思ひになつてもかまいません。ただ、サードインパクトを止めに來ただけですから。」

そう言つとシンヤは銃をゲンドウではなくレイに向けて構えた。

「やめろ、塔條!」

その忠告も聞き入れず、シンヤは発砲した。

パン！！

放たれた弾丸はレイが展開したA・T・フィールドによって止められた。

ゲンドウはほっとした表情を浮かべていた。

「やはり使徒としての力が目覚めつつあるようですね。」

それを無視してシンヤは別の弾丸を込めるとまたレイに向かって構えた。

「これでおとなしくなってください！！！」

パン！！

2発目の弾丸は弾丸ではなかった。

針だった。

さっきと同じようにレイのA・T・フィールドにぶつかった。

しかしこの針はフィールドを貫くとレイの首元へと刺さった。

「はっ・・・」

レイが静かに倒れた。

「レイ！レイ！」

レイに駆け寄り心配するゲンドウをよそにシンヤはまた銃に弾丸を込めながら言った。

「麻酔針ですよ。SEEL E 謹製の特注品です。アンチ A・T・フィールドの力があります。」

シンヤは言い終わるとすかさず、立ち上がろうとしたゲンドウにも麻酔針を打ち込んだ。

（発令所）

パンパンパンパン！！！！

突如として新たな軍隊が現れた。

外に出ていた隊員はすべて倒されているようだ。

発令所の10人足らずの隊員たちは一斉に銃を構えた。

やってきた軍隊はざっと50人いるだろうか。

その先頭にいたのは、

「加治！生きていたのか」

まぎれもない加治リョウジだった。

「はい、まあ、死んだふり。というものでしょうか。」

リョウジは笑いながら答えると隊長らしき男に呼びかけた。

「国連軍第38旅団第4支部第9小隊だ！」

今すぐすべての武器を下ろし、撤退せよ。

これは国連事務総長からの正式な通達だ！！」

それを聞いた隊長は苦渋の表情を浮かべると部下に命令した。

「撤退する！！怪我人と遺体を運べ！！」

その声に従って戦自は発令所から出て行った。

「加持、この部隊は一体何だね。」

冬月は加治に尋ねた。

「さっき言った通りです。国連軍第38旅団第4支部第9小隊、通称……」

「龍の騎士団か……」

「はい、SEELEの計画を潰すために国連事務総長が秘密裏に作った特殊部隊です。」

冬月はそれを聞くと兵士たちを見た。

どの兵士の肩にも、西洋のドラゴンと東洋の龍をかたどったエンブレムが付いている。

「ところで、碇とレイ、葛城一尉を知らんかね。」

冬月はそのエンブレムを見ながらまた尋ねた。

「葛城なら私が病院に送りました。」

司令とレイは私の部下が仕留めました。」

「仕留めた？」

「はい、サードインパクトを起こされると厄介なので麻酔針で・・

」

リョウジは申し訳なさそうな顔をした。

「ところで初号機と弐号機は？」

「あのドームの中だ。解析は終わったか？」

冬月は画面を指差した。

「こ、これは！」

「ああ、そうだ。アダムにもリリスにも出せない、リリンとリリスが力を合わせたときだけ作ることのできる、A・T・シールドだ。」

」

「副所長、解析が終わりました。

ドーム上方にシールドがフィールド化しているところがあります。」

「そこなら中和ができるな。しかし・・・」

「任せろ。冬月」

そこに現れたのはゲンドウだった。

さっきまで隊長らしき男がいた裏通路の入り口から何事もなかったような顔で歩いてきた。

左肩にレイを担ぎ、右肩に塔條を担いでいる。

「加治、今回は許すが今度は許さないからな。」

リョウジにそう言い捨てると司令席に座り、2人を下ろした。

「病院に連れて行ってくれ。2、3日で目覚めると思うがな。」

「おい、碇。どういことだ。」

「塔條が撃った麻酔針をよけてやったのさ。」

「そのことではない!」

冬月が詰め寄った。

「ああ、シールドの件か。私の左拳のアダムから、タブリスを再生する。」

「た、タブリスだとお！」

リョウジを含めたゲンドウ以外の者全員が驚いた。

「確かエヴァの新工法でL・C・Lから肉体を作る技術があっただろう。」

やつの遺伝子は保管されているから作れないことはない。

それに魂を込めればタブリスの完成だ。」

「しかし、時間が・・・」

「心配ない。赤木博士がすでにとりかかっている。30分もあれば肉体は完成する。」

発令所が静寂に包まれた。

「加持。」

「はい。何でしょう。碇司令。」

「部隊を連れて第3新東京市に潜んでいるSEELEの滝上を捕まえろ。SEELEへの反撃開始だ！」

ゲンドウがにやりと笑った。

「はい。碇司令。」

50人余りの龍の騎士団は発令所を出て行った。

復活した使徒

（研究室）

「はあ、いきなり使徒を新工法で作れって言われても・・・」

リツコは機械を組みたてながら、暗い部屋の中で溜息をついた。

いろいろなことをした自分でも、L・C・Lから人を作るのは無理難題である。

机の上に目を落とした。そこはスポットライトに照らされたように窓から光が入ってきていた。

そこには今組み立てている機械の設計図がある。

七菱工業がNERVに提出した「ななびしリリース体液より人体およびエヴァンゲリオン構築法。」のコピーである。

七菱が実に12年の歳月をかけて完成させた究極のエヴァ工法である。

従来の工法では3年かけて実に12兆円を使っていたが、この工法では工期は2カ月、費用は600億まで削減される。

しかし問題はその工事に使う機械である。

機械の部品はほとんどがNERV内にある精密機器の部品を流用することができるが、問題は本当に動くかである。

七菱のテストでは7回中、目的の物を作り出せたのは実に5回。
あとの2回は奇形のアダムが出たらしい。

しかし今回は失敗は許されない。

間違ってアダムやリリスのコピーなんか出してしまっただけは大変である。

アダムが復活すれば、一瞬でこの世界はThe ENDである。

「ある意味世界の命運がかかっているわね……。ふっ」

リツコは軽く笑うと、付属の水槽にL・C・Lの注水を始めた。

オレンジ色の少し粘りのある液体が人1人入れる水槽へと注がれ始めた。

水槽に逆さに映る自分の顔をリツコは見た。

「老けてるわね。もうあれから10年近く経つもの。」

まだ大学生で何もしなやみ事がなかった当時を振りかえっていた。

注水が終わったことを確認すると、機械と40本強のケーブルでつながっているパソコンの前へと座った。

パソコンのウィンドウには大量の数字が出されている。その数字は……

「2万1787桁。いつ見ても膨大な数ね。24ヶ時間違えるだけでアダムの復活か……。」

そう言っているとスキャンボタンを押した。

2万1787桁のカヲルの遺伝子に間違いがないかの検査だ。

しばらくかかりそうなのでリツコはコーヒーを手に取り少しずつ飲み始めた。

顔を上げた先の時計は午後の4時を指している。

「SEELEの面々、どうしてるのかしら？」

リツコはふと呟いた。

(ドイツ SEELE本部)

7番が欠けた11体のモノリスが円状に並んでいる。

会場は沈黙に包まれている。

量産機が蒸発し、初号機のA・T・シールド展開による最終覚醒を受け、SEELEの計画は頓挫した。

しかもSEELEナンバー7、滝上が行方不明になっている。

世界各地にいるSEELEメンバーにも国連の捜索の手が迫っている。

SEELEは計画実現寸前の所から、一気に存亡の危機に瀕していた。

その時だった。

ヴォン

ナンバー7のモノリスが姿を現した。

「報告が入った。我々の仕掛けた、MAGIへのハッキングはすべて失敗。国連は龍の騎士団を展開させている。」

「うっ！国連軍第38旅団か・・・」

モノリスの面々に動揺が走る。

「国連も真実を知ってしまったか・・・」

「どうするべきか・・・」

「国連も、NERVもわれらの敵か・・・」

SEELEの面々からは今まで聞かなかった弱音が次々と漏れてくる。

「静かにしろ！」

1番のモノリス、キールが怒鳴った。

そして深い溜息をつくどゆっくりと話し始めた。

「いま全員死んでしまったては計画の再開はできない。

ここはいったん、全員隠れろ。確か死海文書には2023年に悪魔がやってくるとの記述がある。

その時、中国の上海で会おう。」

キールのモノリスはそう言うて消えた。

「くそっ!!。我々が負けてしまうとは!!仕方ない・・・」

キールの声に洩々納得したモノリスは怒鳴り散らしながら消えて行つた。

その後、ここにモノリスが現れることはなかった。

（研究室）

ピー、ピー、ピー

スキヤンの終了を知らせる音が響いた。

コーヒーを飲んだ後、疲れてうとうとしていたリツコは飛び起きた。

パソコンの画面にはグリーンノイの文字で「No Problem」

と表示されている。

「さて、では始めますか。」

「始めるのか。」

後ろからふと声がした。

そこには手袋を外したゲンドウがいた。

「これが必要か」

ゲンドウは右手を顔の前に持ってきた。

そこには、胎児状のアダムがいる。

渚カヲル、第17使徒タブリスの魂はこのアダムにサルベージされている。

今からこれを再び人の肉体に込めるのである。

リツコはアダムを観察した。

魂がこもっているせいか、微かに手や足が動いている。

それを確認すると、リツコは大掛かりな機会をゲンドウの前に持ってきた。

機械の中央には高さ5センチほどの隙間があいている。

ゲンドウは機械の隙間を覗き込んだ。

「これが分離装置か」

「はい司令。始めますので、この隙間に手を入れてください。」

ゲンドウは、少し戸惑い、そして手を入れた。

機械が反応し、隙間に入れたゲンドウの手に七色の光が注がれる。

「く・・・」

ゲンドウの表情が激しい痛みによって歪んだ。

しかし、ゲンドウは耐えた。自分に捨てられ、自分に恨みを抱き、自分が最も愛する人の息子であり、自分の息子を救うためなら、こんな痛みはちっとも痛くない。

自分に捨てられたシンジの心の痛みに比べれば、軽いものである。

しばらくすると、光は消えて痛みも引いた。

「司令、もう手を出してもらっても結構です。」

「ああ、そうか。」

ゲンドウはゆっくりと手を抜いた。

右拳にもうアダムはいなかった。

普通の右手に戻っていた。

「もう魂は取り出されたんだな。」

ゲンドウは白い手袋を再びはめながらリツコに尋ねた。

「はい、もう肉体を作って魂を込めることもできます。」

「そうか、では冬月を呼んでくるから始めておいてくれ。」

ゲンドウはそう言うのと部屋を出てどこかに消えた。

きつと発令所に向かったのだろう。

リツコはその後ろ姿を見届けると、ENTERボタンを押した。

それと同時に、L・C・Lが光りだした。

（ジオフロント内、初号機のA・T・シールド付近）

冬月は、初号機が展開したシールドの真ん前に立って見上げていた。

シールドは、天井部分が崩落し、太陽光が入ってくるようになったジオフロントのど真ん中、NERV本部のすぐ横にある。

太陽の光を受けて虹色に輝き、NERV本部をも虹色に染め上げている。

冬月はそれを見ながらつぶやいた。

「ユイ君、君は神になったんだな。」

「ユイは神ではない。」

「ん？」

「なぜなら、感情というものを持っているからだ。じゃないところんなシールドは展開できない。」

冬月は振り向いた。

そこにはゲンドウがいた。

「準備は整ったのか、碇」

「ああ、問題ない」

そう言うと碇は冬月に右拳を見せた。

「アダムの体もろとも分離するとは。碇、ユイ君を取り戻すのは諦めたのか。」

冬月はそれを見ると厳しい口調で話した。

ゲンドウは慌てることなく、こう答えた。

「諦めてはいない。ただ、息子のことも幸せにしたいと思っただ

けだ。」

そんなゲンドウの言葉を聞いて冬月は驚いた。

「変わったな、碇。この前まではユイ君を取り戻すためにどんな残酷なこともしていたのにな。」

「量産機と戦っているシンジを見て考えが変わった。シンジを死んだ代わりにユイが戻ってきてても、それは幸せではないと思った。」

「そんなことを言うお前は初めて見た。」

「そうか、まあユイがいなくなるまではいつもこんな感じだったがな。」

そんな幸せについて語っているゲンドウに、冬月が別の話題を振った。

「碇、国連からの通達は知っているか。」

「ああ、6ヶ月後にNERVは国連から切り離し、株式会社として再編する計画か。」

「国連はもうSEELIEはつぶれたと勘違いしている、しかもその株式会社は施設だけ売りに出される。つまり・・・」

「つまり、ここの全員は解雇。」

ゲンドウが何でもないような顔をした。

「おまえ、どうする気だ。このままではまたSEELEが復活してしまうぞ。」

「心配ない、冬月は見ているだけでいい。」

ゲンドウはにやりと笑った。

冬月は少し心配になったが、ゲンドウに任せることにした。

「さあ、早く研究室に行くぞ。」

ゲンドウはスタスタと歩いて行った。

「碇、やっと父親になることができたか。」

冬月は笑顔でつぶやくと、ゲンドウに続いて研究室へと向かった。

(中国)

「つまり、SEELEは潰れ、NERVのエヴァンゲリオンも式号機が破損しているんだな。」

「はい、今日本や欧米各国、アメリカにも力はありません。ただ一つ気がかりなのが・・・」

「初号機だな。心配無用だ。国連にこの計画を進言しようと思う。」

ここは中国、北京。

中国の国家主席である紫尊蔚^{シ・ソンイ}は第3新東京市で起きた一連のこの報告を受け、秘書と対策を練っていた。

紫尊蔚は書類を秘書に手渡した。

その書類には、丸秘の巨大な印が入っていた。

「これは・・・」

「初号機の封印計画書だ。しかし、ただの封印とは違う。」

初号機はパイロットが近付くだけでも勝手に起動する奴だ。ならば、パイロットを初号機から遠く引き離せば良い。」

「なるほど、名案ですね。」

紫尊蔚は軽く笑った。そして突然笑い止むと尋ねた。

「次の国連総会はいつだ。」

秘書は突然の質問にも慌てずに冷静に答えた。

「2月の29日です。」

「閏年か。何か面白いことが起こりそうだ。」

いまこそ、我ら中国が世界の先頭に立つべき時だ・・・」

そんな紫尊蔚の姿を夕日が照らしていた。

火の様な真っ赤な夕日は、世界におこる大波乱の前触れだった。

（研究室）

研究室には、発令所の面々と各課の長たちが集まっていた。

「碇司令、遅いですね。」

マコトは腕につけている時計を見た。午後6時を指している。

ガチャン。

後ろの扉が突然開いた。

「まだ動いちゃダメです！葛城さん！」

「いいや、もう大丈夫！自分の体のことは自分でわかるわ！」

看護婦の制止を振り切って研究室に入ってきたのは・・・

「葛城さん！？」

「ミ、ミサト！？」

そう、戦略自衛隊との戦闘でけがを負っているミサトだった。

「あなた、もう怪我は大丈夫なの？」

リツコが驚きの表情で尋ねた。

「まあ、なんとかね・・・ウツ」

ミサトは横腹を押さえた。

そこには包帯が何重にも巻かれている。

「ミサト、大丈夫なの。」

リツコはミサトに駆け寄った。

苦痛でしゃべれないミサトに代わって看護婦が答えた。

「葛城さんの傷は、かなり深いものです。」

内臓は損傷していないものの、麻酔が切れかけている今は非常に強い痛みが出ます。

このまま追加の麻酔をしないと、痛みでショック死するかもしれません。

さあ、葛城さん。病院に戻りましょう。」

「大丈夫・・・これは、シンジ君の事にかかわることよ・・・見届けないわけには・・・いけないわ。」

ミサトは横腹を押さえながら立ち上がった。額には汗が水滴になって出ている。

「大丈夫か、葛城一尉。」

その声を聞いて中にいた面々は一斉に後ろを振り向いた。

「碇司令・・・」

「待たせてすまないな。」

そこにはいつものように黒いサングラスをかけたゲンドウの姿があった。

ゲンドウは部屋の中央に置かれていた機械の前に歩いて行った。

ミサトの前を通り過ぎた時、ミサトがゲンドウに尋ねた。

「碇司令、シンジ君を助けたら、いったいどうするおつもりですか。」

ゲンドウは歩みを止めると、ミサトの方に振り返り一言言った。

「やり直すのみだ。」

ゲンドウは再び前を向くと機械の前へ歩き出した。

「始めてくれ。」

ゲンドウはいつものようにサングラスを軽く押さえながら言っ

た。

「はい」

リツコは迷わずボタンを押した。

ヴォーン。

機械が低い唸り声をあげて動き出した。

同時に水槽が水色のまぶしいLEDに照らされた。

「ウツ」

思わずその場にいた人は目を細めた。

しかし、ゲンドウはそんなこともせずじっと水槽を見つめている。

「碇、なぜ眩しくないのだ。」

冬月が手を額にあてて影を作りながらゲンドウに言った。

「そりゃ、サングラスをしているからだ。」

冬月はサングラスのことをすっかり忘れていた。

「あと少しです、碇司令」

リツコがゲンドウに報告した。

その報告より少し遅れて水槽に変化が起きた。

バチバチバチッ

水槽に稲妻が走る。

それと同時に、人の体の様な線が形成され、徐々に立体になっていく。

立体は回転しながら、オレンジから白に代わっていく。

そして、人間、渚カヲルになった。

「成功だな」

ゲンドウがそうつぶやいた時、カヲルが目を開いた。

「お久しぶりです。碇司令。」

その眼は前と同じく、真っ赤に染まっていた。

「ああ、久しぶりだ。今回の仕事は分かっているだろうな。」

「はい、あなたの拳の中で聞いていましたから。それより、いい加減出してください。こことても窮屈なんですけど。」

カヲルが不満そうな声でゲンドウに訴えた。

「冬月」

冬月はゲンドウに言われて水槽の上部に取り付けられている扉の開閉スイッチを押した。

「ふう。で、いつから開始ですか。その作戦。」

カヲルは開口部の淵に手をかけ、水槽から出ながら尋ねた。

体にはそこらじゅうにスライムの様になったL・C・Lがへばりついている。

「19..00からだ。部屋はそのままの状態にしてある。」

「はい」

そう言うときカヲルは 水槽から飛び降り、そのままどこかへと消えて行った。

「赤木博士、例の遺伝子操作は行ったか。」

「はい、S?機関の遺伝子は無効にしています。なのでアダムに触れてもサードインパクトは起こりません。」

「おそらく当人も気づいている。」

ゲンドウはそう言うと言葉を研究室を出た。

復活した使徒（後書き）

どうも、作者のGENです。

あと1〜2話で第1章は完結します。

なのでここで第2章のお知らせです。

第2章は、ここから8年後、2023年のお話になります。

タイトルは、「第2次使徒戦役」

前に一回アップロードした物の改訂版です。

ぜひお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9770x/>

新世紀エヴァンゲリオン ～光る明日を掴むために～

2011年12月2日20時47分発行